

MGF は、☑️神第一主義、☑️キリスト中心主義、☑️聖霊主導主義の教会

## 礼拝黙想 Meditating on Worship

「聞く耳と見る目は、二つとも主が造られた。」（箴言 20 : 12）

A 「・・・目は、バテ・ラビムの門のそばのヘシュボンの池。・・・」

（雅歌 7 : 4）

脊椎動物の目のように、複雑な機能と構造をもつものが、ランダムな変化の中から、いかなる自然選択によってできたのか、全く説明は困難である。ダーウィン自身、「あらゆる種類の無類の仕掛けをもつ目が自然選択によって造られたであろうと想像するのは、このうえなく不条理のことと思われる、どういふことを、私は率直に告白する。」（チャールズ・ダーウィン著『種の起源』）と率直に告白したのであった。しかし、その後ダーウィンは『種の起源』で、光に反応するだけの膜のような単純な視覚器官から「自然淘汰によって・・・完璧な視覚器官へと変わった」のであろうと述べている。単純な光感受性のある点（細胞）から洗練された人間のカメラ型の目に至る進路の経路を示すことにより、目が進化によってできたものであると言うのだ。

しかし博物館で、自動車が年代順に古いものから新しいものという順序で並べられているのを見ても、誰も、走る競争をしているうちに車が進化したとは考えない。車は技術者の絶えざる創造力の投入によって発展したのである。同様に、単純な感光点から高級な目まで並べてみても、それが進化の証拠とはなり得ない。実際、目が発展するそれぞれの段階が大きな飛躍であって、段階を示すだけでは進化と言えないのである。

科学ジャーナリストのリチャード・ミルト

ンも次のように言う。「現代のダーウィニストはたいそう楽観的な考えをもっているようだ。光を感知する細胞といった進化の初期段階における基本的な革新さえおきてしまえば、視力の累積的選択がいくぶん起こりやすくなるという。しかし光を感知する組織が存在しても、水晶体や虹彩のメカニズムや瞼などに関する突然変異の起こりやすさには何の影響も及ぼさない。」（リチャード・ミルトン著『進化論に疑問ありーダーウィニズム神話を検証』）

しかも生化学者のマイケル・ベーエが指摘しているように、単純な感光点が、そもそもどこから来たのか、ダーウィンは説明しようとせず、目の究極的な起源の問題は放り出しているのである。実際、感光点それ自体、単純なものではない。ダーウィンにとってはブラックボックスでしかなかった。それはテレビの複雑さよりもはるかに複雑なものであり、多くの生化学者の研究によって、ようやく視覚の生化学的な構造が明らかになりつつあるのが現状である。（マイケル・ベーエ著『ダーウィンのブラックボックス 生命像への新しい挑戦』）

科学ジャーナリストのフランシス・ヒッチングは、ネオダーウィニズム（現代の主流の進化論）に反対する立場から、次のように論じた。「眼を構成している多くの部品（たとえば水晶体と網膜）が別々に進化して合体しなければならないが、そんなことが偶然に起きるはずがない。進化途上の未完成の眼に何の生存上の価値があるのか。」（フランシス・ヒッチング著『キリンの首ーダーウィンはどこで間違ったか』）

「ダーウィンの進化論」は、明確に偶然が支配する世界である。例えば、人間のような精緻な生命体はいかにして造られたか？ダーウィンの進化論では次のように説明される。地球上の生命は原始生命から始まり、突然変異により、様々の生物種が生まれ、その中で、環境に適応したものが生き残った。この理論のポイントは、偶然に起こる突然変異により、多種多様な生物種が生まれ、適者生存の仕組みにより、勝組が選択される、という点。つまり、人間は偶然の産物であり、あらかじめ設計されたものではない。

しかし、人間のような複雑で精緻きわまる存在が、偶然の連発で生まれるわけがない。ダーウィンも最初、人間の目について進化論の論理では説明できないとしていた。

人間の目は、最も精巧なカメラよりはるかに複雑だ。眼球は、ガラス体とそれを包む網膜、光を集める水晶体、水晶体の厚みを変えて焦点を調節する毛様体、光量を調整する瞳孔、水晶体をシールドする角膜、さらには集光した光情報を脳に伝える視神経からなる。

ここで重要な点は、目はこれらの部品がすべて同時に出現しないかぎり機能を果たさないということ。ところが、目が段階的に進化したとすれば、すべての部品がそろうまで、各部品はガラタにすぎない。ところが、意味のないガラタ部品はすべての部品がそろうまで生きのびることはできない。意味のないものは自然淘汰されるからだ。つまり、目はいつまでたっても完成しない。これは現実と矛盾する。目は現実に存在しているからだ。

ウィン・コンクリン)

生物は、初めから全部の機能を持って生まれなければ、生きることはできない。食べることはできても、排泄機能を持っていないければ、生きることはできない。排泄機能があっても、生殖機能がなければ子孫は残せない。生殖機能があっても、運動機能がなければ、食べ物は得られない。このように、生物は誕生の初めから完全な機能を全て持たないと、全く生きることができないのである。進化論は、徐々に機能が備わっていったと想像するが、そう考えるのは実際上、不可能なのである。

進化論の伝家の宝刀「自然淘汰」を逆手に取った恐るべき反論である。目は神が設計し創造した必然の産物で、偶然にできたものではない。だから、どれほど複雑であっても驚くことはないのだ。

生命に不可欠なタンパク質は、アミノ酸が文字のように順序正しく並べられないと合成されない。例えば、たった 50 のアミノ酸から成るタンパク質が偶然に作られる確率は 10 の 65 乗分の 1。遺伝子学の世界の権威、村上和雄(筑波大名誉教授)曰く「細胞一個が生まれる確率は、宝くじに 100 回連続当選する確率のようなものだ」。さらに自然発生した生命が生物になる確率は 10 の 100 万乗分の 1 と言われる。ところが、実際はその確率はもっと低くなる。なぜなら、宇宙は時間が経てば経つほど、「エントロピー増大の法則」(自然界の中では秩序は崩壊し、混乱が増大する)により、進化とは逆の退化の方向に進むからだ。つまり、宇宙の年齢が 150 億年だろうと、150 兆年だろうと、生命が自然発生する確率は限りなくゼロに近い。

「偶然に生命が発生する確率は、印刷工場の爆発によって完全な辞書が出来上がる確率と同じだと考えてよいだろう！」(プリントン大学生物学教授エド

「生命が偶然に発生すると信じることは『ゴミ捨て場を襲った竜巻が、そこにあった物を寄せ集め、ボーイング747型機ができる』と信じるようなものだ。」「この世界がどんなに広くても、生命体が偶然で生まれることはありえない。猿の一群がめちやくちやにタイプライターを叩いても、シェークスピア作品が生まれることはない。仮にそれが可能だとしても、そのために必要な猿の一群を、大量のタイプライターを、また書き損じの紙を入れる大量のゴミ箱を保有するほど、この世界は大きくはない。生命体も、これと同じである」(英国の天文学者フレッド・ホイール卿)

「この理論(進化論)は、レンガをデタラメに積み上げてほうっておくと、城やギリシャの神殿が勝手に出来上がったというのと同じだ。」(セント=ジェルジ・アルベルト ハンガリーの生化学者 ビタミンCの発見などにより、1937年度のノーベル生理学医学賞を受賞)

「生物学者がどこに目を向けようとも、[神聖なる]目的の原則・・・が迫ってくる。・・・DNA 分子の起源が、全くの偶然によるものだ、などという可能性は、真剣に考慮するだけの価値は全くない。」(エルンスト・ボリス・チェイン ペニシリンの分離・精製に関する研究により、1945 年度のノーベル生理学・医学賞を受賞)

「合理的な見解は二者択一しかありません。自然発生説かもしくは超自然創造説を信じるかのどちらかです。それ以外の立場はありません。近代の生物学者の大半は自然発生説の没落に納得していますが、特別創造を信じる立場を受け入れたがらない人には何も残ることはありません。」(ジョージ・ワルド アメリカの科学者で、網膜の色素の研究で知られる 1967 年度のノーベル生理学・医学賞を受賞)

\*\*\*\*\*

ある日先生は、生徒に「洋服は何のために存在している？」と問いかけた。生徒は「着るためです」と答えた。次に「靴は？」と聞くと、「履くためです」と答えた。続いて先生は「自動車は？家は？」と聞いていったが、生徒はいとも簡単に答えていった。

最後に先生は、「では人間は何のために存在していると思う？」と聞いたが、生徒は真剣に考えたすえ、「先生、僕にはまだその答えがわからないのです」と答えた。この生徒は、最も大切な質問に対する答えを、まだ知らなかったのである。

もし人間を含む生命が進化してきたのであれば、この質問は無意味である。なぜなら、進化論とは、偶然による自然発生を前提とする考えなので、その説が正しければ、人間にははじめから、「造られた目的」や「存在する目的」が無いことになるからだ。

しかし、もし人間が創造者によって造られた存在ならば、そこには造られた目的と意義がある。そして、造られた目的を創造者から教えてもらうなら、存在する目的に沿った、意義深い人生を送れるはずである。

\*\*\*\*\*

「2つの良い目を持っていて何も見えないよりは、盲目であっても心で見えるほうがよい。」

「盲目であることは、悲しいことです。けれど、目が見えるのに見ようとしないのは、もっと悲しいことです。」

「目に見えるものは移ろいやすいけれど、目に見えないものは永遠に変わりません。」

(ヘレン・ケラー) Ω

<お知らせ ANNOUNCEMENT>

★ 11月3日(日) MGF 秋の運動会

MGF はキリスト狂徒の集まるキリスト狂会

「教会 [マラナサ・グレイス・フェローシップ (略称: MGF)] はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです」(エペソ 1: 23)。「あなたがた [MGF] は、キリストにあって満たされているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです」(コロサイ 2: 10)。